

子どもの遊びのなかにある学びについての一考察

飛 田 隆

1. はじめに

子どもの「遊び」の中にある学びについて幼稚園教育を中心に考えてみたい。幼稚園教育において指針となる現在の幼稚園教育要領（平成20年告示）には第1章総則第1幼稚園教育の基本の2に遊びについての記載がある。

「2 幼児の自発的な活動としての遊びは、心身の調和のとれた発達の基礎を培う重要な学習であることを考慮して、遊びを通しての指導を中心として第2章に示すねらいが総合的に達成されるようにすること。」⁽¹⁾（傍線筆者）

ここで注目したいことは「自発的な活動としての遊び」をとらえている点である。つまり自発的活動ではない遊びについては次に続く「発達の基礎を培う重要な学習」にはならないという考え方もできる。

自発的な活動としての遊びを考えながらその遊びのなかにある学びと子どもたちに直接的影響を与える教員のかかわり方についても考えてみたい。

幼稚園教育の中にある遊びの一つの分け方として自由遊びと一斉保育（設定保育と呼ばれることもある）という考え方がある。自由遊びというのは「幼児が自ら選んで行う活動や経験を発展させる」⁽²⁾ 場合や子どもが自由に遊ぶ時間を保障され好きなことをしてもよい時間とされている。この時間の中では制限されるのは場所と危険な行為と他の子どもに迷惑をかけないことぐらいであると思う。そのことさえ守ればたとえ何をしなくても、教員から特に指導されることはない時間である。しかしながら放任ではないので教員の考える指導計画の中に含まれている。

一斉保育とは教員が遊びの内容を考え決められた時間指導し、クラス全員が教員の立てた計画に添って遊ぶことと考えられている。一斉保育を行う場合には「どの子どもにも『平等に保育をしたい』という保育者の願いから、あるいは一人の保育者に対する子どもの受け持ち人数の多さから安全性を確保するために一斉保育の形態がとられた園は多かった」⁽³⁾ 多くの場合一斉保育は幼稚園の保育計画に基づいて考えられる。園児一人一人の発達や興味関心等を考え年間計画、学期案、月案、週案、日案などきめ細かく指導案が考えられており子どもの発達に必要だと考えられることを一斉保育に取り入れている。

この一斉保育の考え方に一部の教員からは幼稚園教育要領の中にある「自発的な活動としての遊び」にあたらぬのではないかと懸念する意見もある。「一斉保育では、ひとりの保育者が多くの幼児を計画的・能率的に指導できるという利点があり、幼児全員に共通の経験や活動させるのに適しているが、幼児の興味や欲求よりも保育者の意図が先行するため、強制的な押し付けになりやすく、個人差が無視される危険がある。」⁽⁴⁾ 確かに教員の指導の下決められた遊びをクラス一斉に行うということから考えれば教員が中心になって

の指導であり自発的な活動としての遊びにあたらないという考え方も理解できる。しかしながら日本の保育機関では一斉保育を行うような形態がとられている。多くの幼稚園では学齢別保育という同一年齢でクラスを構成する方法をとっている「幼稚園設置基準」においても年齢別保育が原則となっている。考え方としては「一般常識では、同年齢であれば発達の程度も近似していると考えられる。年齢別保育は、学級の幼児が一斉に同一の活動をできるように発達程度にあまり差のない同一年齢の幼児で学習単位を編成し、一斉保育による教授・学習の効率を考えたシステムである。学齢別保育は、学習能力の発達能力にかかわらず、すべての同一年齢の幼児に平等な教育を行う手段ともみなされる。」⁽⁵⁾ 具体的には子どもたちの自由遊びの場面から現在の子どもたちの興味や関心を教員が観察し、そのことを踏まえたうえで同一年齢なので共通の発達課題であると考え一斉保育として実践する。子どもたちは一斉保育で獲得した遊びが刺激となってまた自由遊びでその遊びを取り入れていくというつながりが期待されている。自由遊びと一斉保育のつながりの中で「自発的な活動としての遊び」が担保されていると考えられるが、そのためには教員の考え方が重要になってくる。子どもの遊びのなかにある学びを獲得させるためには、子どもたちにどのように関わればよいのか教員の役割について考えたい。

2. 一斉保育での子どもの学びと教員の役割

一斉保育は教員が子どもたちの日々の様子を丁寧に観察し、年齢に応じた発達課題などを勘案して指導計画を立て子どもたちに遊びを教える保育である。保育計画でどんな遊びを取り入れるかも大切であるが、教員が遊びを通して子どもたちに何を体験させ身近なことに興味や関心を持たせることが出来るのかを意識することも教員の役割の一つになる。一斉保育後の子どもたちの生活や遊びをどう広げていくか考え、子どもたちが自由に遊ぶ中に一斉保育で体験したことが広がっていくように計画する必要がある。

例えば5歳児のクラスが2クラスありAクラスの教員とBクラスの教員が新聞紙を使った陣取りじゃんけんゲームをする。ルールはまず子ども一人一人が新聞紙1枚を開いた状態で床に置く、この新聞紙が自分の陣地になる。その新聞紙の上に乗り教員と参加者全員がじゃんけんをし、教員にじゃんけんでは負けた場合は自分が乗っている新聞紙を半分に折りまた同じ場所に置いてその上に乗る。その繰り返しをして新聞紙が小さくなり上に乗れなくなった時やバランスを崩して新聞紙から足が床についてしまったらそこで終わりになる。最後まで残った子どもが優勝というゲームである。

A教員はこの説明通りにゲームのルールを子どもたちに伝えて一斉保育をおこなった。

B教員は幼稚園教育要領の環境「1ねらい(3)身近な事象を見たり、考えたり、扱ったりする中で、物の性質や数量、文字などに対する感覚を豊かにする。」⁽⁶⁾ また「2内容(8)日常生活の中で数量や図形などに関心をもつ(9)日常生活の中で簡単な標識や文字などに関心をもつ」⁽⁷⁾ それから3内容の取扱い(4)「数量や文字などに関しては、日常生活の中で幼児自身の必要感に基づく体験を大切に、数量や文字などに関する興味や関心、感覚が養われようにすること。」⁽⁸⁾を意識して次のように説明をした。

子どもたちに新聞紙を意識させるために、B教員「この紙はなんていうのでしょうか知っている人は教えてください」子ども「新聞っていうの、お父さんやお母さんが見ている」、

B教員「そうだねーお父さんやお母さんが読んでいるよね、正解です。新聞といます」
B教員「じゃどんなことが書いてあるか知っている人」子ども「マンガが書いてある。お天気とか野球とか字がいっぱい、写真もある。あとねー宣伝とかテレビの番組とかがわかる」
B教員「そうですねーマンガとか字とか、写真やテレビで今日は何をすることがわかる番組表という便利なことも書いてあるよね。字がいっぱいなのはニュースと言って昨日や少し前に起こったことで多くの人たちが知りたいことやまた伝えたほうが良いと思うことなどが書いてあります。あとは上の方に日付があります。毎日新しい新聞が届いています。今日は何日だかわかる人」子ども「○日、○曜日」
B教員「みんなよく知っているね。そうか連絡帳に毎日シール張っているからわかったんですね、もう一つ新聞紙の形の話をして。この形は長方形といます。この形はとても不思議で角と角をきちっとそろえて半分に折るとまた同じ形の長方形になります。でもいい加減に折ってしまうと同じ形にはなりません。だからじゃんけんで負けた時にはちゃんと角と角をそろえて同じ形になるようにして下さい。お約束です」子ども「ハイ」ここからゲームが始まる。

同じゲームをするにしてもA教員とB教員では子どもに与える影響にはどのような違いが考えられるであろうか、A教員のクラスの子ども達はゲームで遊んで楽しかったということになる。それはそれで子どもたちの中に楽しかった思い出やルールなどの理解は進んだと考えられる。ではBクラスの子どもたちはどのような刺激を受けたことが考えられるであろうか、当然Aクラスの子どもたちが得た刺激は同じように受けていると考えられる。その他に新聞紙についての興味や関心を持つ子どももいると考えられる。次の日から家族が読んでいる新聞をのぞき込んだり、新聞に書かれていることを聞いたりしているのではないかと思われる。

教員からの「新聞」という言葉かけによって今まで見ていた新聞から意識する新聞となり文字や日付、写真などを通して身近なことに興味を広げていくきっかけになったと考えられる。また新聞の形に注目させているので身近な物の形に興味を示す子もいるであろうし、「長方形」という言葉から形を示す言葉に関心を持つ子どももいるであろう。中には毎日出席ノートにシールを張っているが日付、曜日を意識していないでただシールを張っていた子どもが新聞の日付を意識したことで出席ノートの日付と一致することを発見し、初めて「日にち」を意識するということが考えられる。子どもたちが日常していることが必ずしも内容を理解して行動しているとは限らないこともあると考え、幼稚園生活の中で教員は確認する必要がある。

教員が新聞を意識させたことで自由遊びのなかで新聞に関することは多くなったと考えられる。同じゲームで遊ぶ指導計画であっても教員が幼稚園教育要領を読み込み実践の中で生かそうと考えている場合とそうでない場合には、子どもの知的好奇心を刺激する機会は違ってくる。遊びのなかにある学びを意識したかかわり方とそうでないかかわり方では毎日、毎時間の中での差は大きい、このことを教員は意識する必要がある。

3. 自由保育での子どもの学びと教員の役割

子どもたちが自由に遊んでいる時間に教員はどうかかわるか、自由遊びの時間にどう子どもの遊びを予想して教員の意図に添った遊びの経験を広げることが出来るか。子どもの

ねらいを達成するために教員は指導計画をどれだけ具体的に幅広く考えられるかが大切である。それと同時にもっとも重要なことは教員が子どもの遊びをいかに一緒に楽しめるかということかもしれない。

株式会社フレーベル館出版の「名のない遊び」⁽⁹⁾という本がある。まさに自由遊びで子どもたちがする遊びについて教員がどう記録したらよいか困る遊びについて書かれている。「名のない遊び」という説明には「保育者が指導計画を立てる場合、カリキュラムに記載するのは『折り紙遊び』『縄跳び』『こま回し』など、名前のついている遊びです。カリキュラムは将来の保育の見通しですから、知っている遊びしか書くことはできないのはある意味当然です。しかし、実際の遊びはどうでしょうか。保育の現場を見てみると、上のような名前のついた、明確に定義できる遊びばかりでないことにお気づきでしょう。むしろ量的にみれば遊び全体の中で占める割合はこのような遊びのほうが多いくらいです。そして、子どもの自発的な活動ということもあって、遊びの質という意味でも、高い水準のものなのです。この本では、このような遊びを『名のない遊び』と呼んで、この遊びに焦点を当て、位置づけをはっきりさせたいと思います。」⁽¹⁰⁾ この本の中には数多くの子どもたちの遊びが紹介されているがここでは一例を紹介したい。

「事例5 タイヤあそびから発生 園庭で自由遊びをしている時間のことです。タイヤ半分が埋め込まれている固定遊具のところで、子どもたちが遊んでいて、5歳の男の子がいちばん端のタイヤの上でピョンピョン跳びはねていました。すると、そのタイヤがグシャッとつぶれてしまったのです。男の子はニヤッと笑って横に飛び下りました。するとタイヤが元に戻ろうと徐々に浮き上がり、バーンとはね返りました。そのとき、男の子の靴の裏についていた砂がタイヤの上に乗っていて、タイヤがはね返ると同時にまわりに散らばったのです。それを見ていた男の子はびっくりしたまましばらく立っていました。そしてもう一度タイヤの上に乗る、今度はタイヤを思い切りつぶして同じことを繰り返したのです。そして3回目、今度はタイヤをつぶすと真ん中のへこんだところから足を片方ずつずらし、両側の山になっているところに足をかけました。そして近くにいた4歳と5歳の男の子に『ねえ、ここ(タイヤのへこんだ部分)に砂を入れてよ』と頼んだのです。頼まれた友だちは何だろうというようすで、それでも言われたとおりに砂を手で入れると、『もういいよ。いいか、見ててみ』と言うと、さっそうとタイヤから飛び下りたのです。するとタイヤはだんだんと持ち上がりバーンとはね返って砂の雨を降らせたのです。二人の男の子は砂をかぶりながらも、すごいという顔で『わあ花火だ』と大声で叫びました。本人は満足げにもう一度始めました。そしてまわりに自慢げにふれ回り、見物人は7～8人になったのです。一度見るとほかの子もやりたくてしかたがないのですが、あいにくほかのタイヤは硬かったり、体重の軽い子はつぶすことができないのです。何回かやるうちに保育者から『ほかの花火はないの?』と聞かれると、まわりにいた子どもたちから『葉っぱの花火』『石の花火』『ボールの花火』などさまざまなアイデアが浮かび、注文を受けてすべてやって見せてくれました。しかし、最終的には砂が最もおもしろく、しかも砂が少ないほうがよく飛ぶことを発見したのです。まわりは砂を入れるのを専門にする子、砂をかぶりたがる子など、そこからいろいろな遊びが始まりました。この遊びは『タイヤの花火』と子どもたちによって名づけられ、断続的に遊ばれるようになりました。』⁽¹¹⁾ (傍線筆者)

一人の男の子が偶然見つけた不思議から遊びが生まれているが、この中に出てくる傍線
で引いたところの場面がその後の遊びを発展させていると考えられる。もし子どもの気持ち
に共感することなく保育者が「砂がいろんなところに飛び散りまわりの人に迷惑がかか
ることはやめなさい」と注意していたなら、この遊びはおそらくそこで終わってしまい後
に続くことはなかったと考えられる。ここでは保育者が『ほかの花火はないの?』といっ
たことで子どもたちは自分たちの遊びに保育者が共感してくれたことを感じ、多様なアイ
デアを生みだし遊びが発展していった。その結果その中から最初に戻り結果的に砂がおも
しろく少量のほうがよく飛ぶことを確認した。子どもたちはこの遊びを通していろいろな
ことを学んだに違いない。保育者が何よりも子どもたちの遊びと一緒に楽しんだことから
自由遊びの学びが広がったと考えられる。このことを一斉保育の中でどう取り上げていく
かが大切になる。自由遊びのなかで繰り返される名もない遊びすべてを保育者が取り上
げることは無理であるが常に子どもの遊びを大切に、丁寧に観察することは重要であ
る。

4. 環境をどう意識するか子どもの学びと教員の役割

幼稚園教育要領（平成20年3月告示）「第1章総則 第1幼稚園教育の基本には幼児の
特性を踏まえ、環境を通して行うものであることを基本とする。」⁽¹²⁾ ということから「保
育室にいわゆる『コーナー』を設置し、子どもたちに遊具を用意し遊べる場所の確保をし
た」⁽¹³⁾ これで環境教育と考えている園もある。また環境を通して行うために必要なことと
して「従来も、環境構成あるいは環境設定という用語が幼稚園教育で使われていました。
その環境の中の代表がコーナーの設定といわれるものです。保育室あるいは園庭に保育す
る側が望んでいる遊び、活動を引き出す材料、用具をコーナーとして設定しておき、そ
こで子どもの活動を誘発していこうとする意味をもっている場合が多くみられます」⁽¹⁴⁾ とい
うようにクラスの中に例えば折り紙コーナー、粘土のコーナー、お絵かきコーナーなどの
設定しておく。園庭にも子どもに取り組んでほしいサーキット遊びや縄跳び、砂場の遊具
などを用意しておきコーナーの種類だけ整えておけば環境による教育と考えている教員も
いるが、コーナー遊びの設定だけでは不十分である。「環境を通して行う教育は、遊具や用
具、素材だけを配置して、後は幼児の動くままに任せるといったものとは本質的に異なる
ものである。もとより、環境に含まれている教育的価値を教師が取り出して直接幼児に押
し付けたり、詰め込んだりするものではない。環境の中に教育的価値を含ませながら、幼
児が自ら興味や関心をもって環境に取り組み、試行錯誤を経て、環境へのふさわしいかか
わり方を身に付けていくことを意図した教育である。それは同時に、幼児の環境との主体
的なかかわりを大切にされた教育であるから、幼児の視点から見ると、自由感あふれる教育
であるといえる。」⁽¹⁵⁾

例えば粘土のコーナーを用意しておいたとしよう。何人かの子どもは粘土に触り遊ぶか
もしれないが、何を作ったらよいかわからずにただ長くのばしたりちぎったりして時間を
過ごす子どもや触れてはみたものの粘土特有の匂いに抵抗を示す子どももいると考えられ
る。また粘土のべたべたする感触を泥のようにとらえて汚いと感じる子どももいる。いろい
ろな理由で遊びが続かないことも想像できる。

そういう場合はまず教員は粘土で遊ぶ姿を見せたり、遊んでいる子どもと一緒に粘土で形のあるものを作ったり、時には長いヘビを作ろうとか団子を作ってみようなど遊び方の提案をして粘土で遊ぶきっかけを作ること大切である。そうすることで子どもの粘土で遊んでみたいという気持ちを持たせることが出来る。「教師自身も環境の一部である。教師の動きや態度は幼児の安心感の源であり、幼児の視線は、教師の意図する、しないにかかわらず、教師の姿に注がれていることが少なくない。物的環境の構成に取り組んでいる教師の姿や同じ仲間の姿があってこそ、その物的環境への幼児の興味や関心が生み出される。教師がモデルとして物的環境へのかかわりを示すことで、充実した環境のかかわりが生まれてくる。」⁽¹⁶⁾ もう一つの教員としての役割は子どもの気持ちに共感することである。粘土特有の匂いや、感触により粘土に触れない子どもの状態からどうすればそのようなことを改善するか考えることも大切である。教師の願いとしては今日の前にある粘土で遊んでほしいと考えたとしても、まず子どもの今の気持ちや感覚を大切に匂いの少ない粘土を用意することが大切になる。また粘土の感触が嫌な子どもに対しては感触には似ているが食べ物である小麦粉粘土を用意することで、泥のような感触で汚いというイメージを変えることができ、やがて粘土に触れることができるようになってくることもある。子どもの粘土に触れたくないという気持ちを理解し子どもに共感することで子どもと教員との信頼関係が生まれることにつながる。教員との信頼関係をもとにして子どもは新しいことにも挑戦していくことになる。

幼稚園教育要領（平成20年3月告示）「環境3内容の取扱い（2）幼児期において自然のもつ意味は大きく、自然の大きさ、美しさ、不思議さなどに直接触れる体験を通して、幼児の心が安らぎ、豊かな感情、好奇心、思考力、表現力の基礎が培われることを踏まえ、幼児が自然とのかかわりを深めることができるよう工夫すること。（3）身近な事象や動植物に対する感動を伝え合い、共感し合うことなどを通して自分からかかわろうとする意欲を育てるとともに、様々なかかわり方を通してそれらに対する親しみや畏敬の念、生命を大切にする気持ち、公共心、探求心などが養われるようにすること。」⁽¹⁷⁾ 領域「環境」の中で内容の取扱いは4項目ありその中で上記にあげた2項目が自然・生命・直接体験に関する取扱いである。子どもたちにとって自然のかかわり方、動植物との触れ合いの大切さがわかる記述である。

環境を意識した教育を行うためには飼育活動も必要であると考えられる。飼育の中で難しいのは小動物、虫、金魚などが死んだときの扱いである。教員の生命に対する考え方が子どもたちに影響することが考えられる。飼育の難しさについて例をあげて考えたい。

年長になるとクラスの中で自分たちが捕まえた虫を飼育したいとの意見が出る。教員も子どもたちの意見を取り入れクラスで小動物を飼うことになる。6月頃になると関東ではバッタが多くみられるようになる。子どもたちは喜んで捕まえてくるようになりクラスでの飼育が始まる。子どもたちもせっかく捕まえたバッタなので何を食べるのか、飼育ケースの環境はどうすればよいのかなど図鑑や虫に詳しい教員に聞いたりして一生懸命育てる。それでも中には死んでしまい墓をつくり子どもたちで埋めることも覚える。7月に入るとカマキリがよく目につくようになってくる。多くの場合男の子がカマキリの姿に魅せられるようになってきてカマキリ捕りに挑戦するが初めのうちはカマキリに指を挟まれて

泣きべそをかいていた子どもたちもやがて捕まえられるようになる。捕まえたカマキリを飼育ケースの中に入れて飼育が始まる。ここまでは良いのだがカマキリを飼うということは生きてエサが必要になるということである。子どもたちもカマキリを捕まえに行く中でカマキリが生きてエサを捕まえ食べているのを見たり図鑑で調べたりしてそのことは知っている。それまで大切に育ててきたバッタをエサにしなければ大事なカマキリを育てられないことになり子どもたちは困ってしまい教員に助けを求めてくる場合もある。教員の対応としては難しいところだ「生命を大切に作る気持ち」からいけば野に返してあげるといことになるのかもしれないが、そのことを教員が決めて子どもに伝え逃がす。ということだけではないと考える。子どもと一緒に頭をかかえながら考え、一緒に迷うことも必要ではないかと思う。その中から私たち人間も命ある物を食べていることに気づき食べ物の大切さや生命のありがたさに気がつくことまで考えて飼育活動に取り組んでほしい。環境による教育はたんに飼育だけしていればよいという教育ではない、子どもたちの自発的な飼育活動に教員がどのような計画をたて飼育活動を通して多くのことを学ばせることが出来るかが求められている。

5. おわりに

子どもの遊びのなかにある学びについて考えてきた。子どもの自由な遊びのなかには学びがあり子どものする名もない遊びのなかには子どもそれぞれの気づきがある。また知的好奇心を刺激して学んでいることも想像できる。子どもの遊びはなかなか教員が予想できないものも多い、教員としてはその遊びをなるべく多く予想して指導計画に入れることが大切である。子どもたちの遊びのなかにある学びはもちろん貴重であるが、教員が刺激しなければ消えてしまうような学びも無数にあると考えられる。

教員が主体的に行う一斉保育は子どもたちの自由な遊びを観察しその中にある遊びの芽を取り入れることから始めなければ教員からの押し付けになる危険がある。教員指導の保育は大きく分けて二つ大切なことがあると考えている。一つは子どもの姿から多くを予想して、できる限りの可能性と柔軟性を持った指導計画を立てることであると考えている。もう一つは子どもたちと共感しながら子どもたちの遊びを共に楽しむ姿勢である。子どもたちの遊びを教員がいかにも楽しめるかが子どもの遊びのなかには隠れている学びを引き出すことになるのではないかと考えている。この二つの条件がそろっていなければ子どもの遊びのなかにある学びになかなか気づけない教員になってしまう。

教員からするとなかなか認めにくい遊びかもしれないが子どもの自由な遊びの例からそのことを考えたい。

子どもたちは「ツバキ落とし」と言っていた。幼稚園の二階の屋上に上がり手すりにつかまりながら（落ちるような危険な行為ではない）数人の子どもが下へツバキを落としていた。それを見た教員は汚い遊びだと思いやめさせるつもりで二階に上がっていった。そばまで行ってみると、どの子も真剣にツバキを落としていることに気がついて、しばらく様子を見ていて気がついた。ツバキを落としている下には目印の的のような石が置いてあること、子どもたちは思いつくままにツバキを落としているのではなく順番に落としていること。順番が来てもすぐにツバキを落とさないうで風がやむのを待っている子と、子ども

の中には明らかに風の流れを計算してツバキを落としている子がいた。その様子はまるで弓道的的あてのように感じた。その遊びは片付けまで続き最後まで真剣であった。教員は下から止めなくてよかったと回想していた。

子どもの遊びには一見すると、くだらなく見える遊びや汚い遊びにも見えるものもあるので注意が必要である。教員の遊びを見る目が試される時でもある。

最後に残酷とも思われる遊びを紹介して終わりにする。

5歳になる男の子が木の下で何か集めては積み上げている。初めはまわりにある砂や砂利、木の枝を集めているように見えたがなんとなく気になって近づいてみるとまわりにいるアリや葉っぱについている虫を殺しては集めていた。なんというむごいことをしているのかと思ひ男の子をのぞき込むと表情は真剣であった。これは何かあると思ひ静かに見ているとしばらくその男の子は虫の死骸をじっと見つめていた。やがて男の子は教員の存在に気づきそばに来ると「死んだ虫は二度と動かないんだね死んだらもう生き返らないんだね」と話した。教員は気になって保護者に家族の様子などを尋ねたが特に変わったことはなかった。その後この男の子に変わったことはなかったが5歳の男の子が「死」ということを理解した瞬間ではなかったかと思える。今の子どもたちの一部にはゲームなどを通して死んでもまたリセットすれば生き返ると信じていて現実社会でも死んでも生き返ると思っている。それからするとこの5歳の男の子の学びは深い。

子どもたちは大人が思っている以上にいろいろなことを考え感じている。また好奇心も知的欲求もある。何よりも冒険家であり、実験家であり、思想家でもあり、科学者でもある。教員は子どもたちの遊びのなかから多くのことを学び、それをまた子どもに伝えていくという役割を担っている。子どもたちの遊びのなかにある学びは教員にとっても学びにつながるという意識を持つことが大切でないかと考えられる。

引用文献

1. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 4頁
2. 森しげる 監修「ちょっと変わった幼児学用語集」北大路書房 2000年 153頁
3. 勅使千鶴「子どもの発達とあそびの指導」ひとなる書房 2010年 91頁
4. 森しげる 監修「ちょっと変わった幼児学用語集」北大路書房 2000年 78頁
5. 同上 88頁
6. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 9頁
7. 同上 9～10頁
8. 同上 10頁
9. 塩川寿平「名のない遊び」フレーベル館 2006年
10. 同上 12頁
11. 同上 19頁
12. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 4頁
13. 勅使千鶴「子どもの発達とあそびの指導」ひとなる書房 2010年 92頁
14. 森上史郎、高杉自子、柴崎正行「幼稚園教育要領解説〈平成10年改訂〉対応」フレーベル館 41頁
15. 文部科学省「幼稚園教育要領解説」（平成20年10月） 27頁
16. 同上 29頁
17. 文部科学省 幼稚園教育要領（平成20年告示） フレーベル館 17頁

Consideration of Learning in the Play of Children

Tobita Takashi

This study is to consider learning in children's play and the role of teachers at the kindergarten: Kindergarten education is done through environment. Significant issue is what environment teachers create for children. It is important for teachers to enjoy playing with children in order to bring out learning from play. Through such attitude of teachers children come to sense sharing ideas with their teachers. It is the first step to good relationship between them. Then children go up to the next stage, in other words, start to approach something new. It goes without saying that play among only children is very important, but play including teachers is more important to deepen learning.